

当麻曼茶羅の研究

——特に中将姫の縁起について——

仏教文化専攻

井 上 大 昂

当麻曼茶羅の原本は奈良県北葛城郡当麻村大字当麻の当麻寺に安置されていて、浄土宗の正依の經典とする三部經の中の一つ觀經をもとに極樂浄土を表わそうとした

阿彌陀浄土變相図である。これと他の智光曼茶羅、清海曼茶羅を合わせて浄土の三曼茶羅といわれているが、その中でもこの当麻曼茶羅は最も古く且つ最も規模の広大なものとされている。ところで、天平時代のこの曼茶羅が鎌倉時代に至つて初めて飛躍的に庶民の信仰の対象とされるようになり、この模本も数多く造られるようになった。その原因としては、この時代からの新興浄土宗の展開によるもの、いわゆる浄土宗の僧達によつてこの曼茶羅の価値が再発見され、浄土信仰鼓吹に役立たせたと思われる、いわゆるこの曼茶羅が中将姫の織成した蓮糸

曼茶羅であるという中将姫縁起の成立によるもの等が考えられる。この中で特に重要と思われるのが当麻曼茶羅創造にまつわる中将姫縁起の存在である。今この中将姫の縁起だけについて考える場合、最初から縁起の起因となるものが一つの固定したすがたではなかつた。それは初期のものから後世へと発展していることを見るのである。そしてその展開の中に浄土教との結びつきがはつきりと何われるのである。

さて、この中将姫縁起が当麻曼茶羅の成立にまつわる縁起である以上は、やはり当麻曼茶羅の成立に関するはつきりした資料が必要となつて来るのであるが、ところが現在においてもまだ、確乎たる史実は究明されていない。それは当麻曼茶羅成立に関する資料が鎌倉時代に至らないと見ることが出来ないし、その資料もまちまちだからである。鎌倉時代の諸文献から、当麻曼茶羅が天平宝字七年六月廿三日に化人が来現して、当寺の創建者麻呂子親王の夫人と共に一夜にして織成されたものだということを事実とするならば、それから鎌倉時代までの数

百年ばかりの間、全く忘れ去られてしまつたことになる。しかし、天平時代は善導大師の影響等もあつて、浄土教の展開はすこぶる活発であつたことから不思議といわねばならない。このことについて佐和隆研氏は「常識的に考えるならば、東台両密教の流行によつて、当麻曼茶羅に対する関心が薄くなつて了い、世間から忘れ去られて了つた状態になつたといひ得るであろう」(仏教芸術四十五号)と述べている。このように鎌倉時代に入るまでの数百年間、なんともいいがたいのである。

さて、当麻曼茶羅図成立に関する初期の文献が藤原時代から鎌倉時代に掛けてみられる。それは諸寺縁起集で長和、寛仁の頃のものとして推定され、その中に二説をあげている。一つは、天平宝字七年六月廿三日夜、化人が表われ、麻呂子親王の夫人と共に一夜にして、蓮糸で交相を織つたというもので、もう一説は当時の寺僧の話であつて、織仏の事については確かな日記がなかつたがしかし、まだこの曼茶羅の下が破れていない時、天平宝字八年という号が織付けてあり、その頃ヨコハギ大納言とい

う人の息女が曼茶羅を写そうと願を起し、思い過ぐる間、一人の化人が来て一夜にして織つて消去つたということ載せている。

次ぎに関係して来るのが嘉応、建永の頃のものといわれる鎌倉光明寺蔵の当麻曼茶羅縁起である。これは絵を挟んだ、絵物語形式になつており、その内容は、大炊天皇の時代によこはぎのおとどという人のむすめがあり、深く仏の道を求め、称讃浄土經一千巻を書いて当麻寺に納めた。その後天平宝字七年六月十五日尼となり、我生身の如来を拜することが出来ないなら、寺門を出ないと誓願し、七日間一心の誠をこらしたところ六月廿日一人の比丘尼来り蓮の莖百駄を集めよというので近江の国の課役に集めさせた。化尼は蓮の莖を折つて糸を出し、井戸を堀つて、五色の色に染めた。そこへ廿三日の夜化女一人現われ、わら二把を油二升にひたし燈火として、戌の時より寅の時に及んで織成し、一丈五尺の曼茶羅一つを飾のない竹を軸として掛け奉り、化尼は西方極楽の教主、阿彌陀如来で、織女は我が左脇の弟子観音であると

いつて西を指して去つていつたというのである。

以上諸寺縁起集の縁起と光明寺蔵の縁起の關係を想像してみると、共に二人が關係して織る説は諸寺縁起集の初めの縁起を用い、中心人物を本願とする扱い方は二説目の縁起を取つていて、化女が現われて来るのは光明寺蔵の縁起に初めて現われるのである。このように見るとこの光明寺蔵の縁起に至つて一応の縁起の形が出来上つたように思える。ところが、實際、当麻曼茶羅図の下縁の九品の中央には縁起文が書かれてあり、天平時代からあるものとすればこの縁起文が一番根本とならなければならぬが残念なことにこれは後世に書き加えられたものであるうという説が確定的であるので問題とならないのである。でもこの縁起文の内容は光明寺蔵の縁起と全く一致するので、光明寺蔵の縁起が出来た後、誰かがそれに基つて書き込んだものと思われるが、又逆のことも考えられる。縁起段の縁起文が先に作られ、書き込まれて後、それを頼つて文学的に縁起絵巻を作りあげたものではないかとも考えられる。いずれにせよ、縁起段の

縁起文や光明寺蔵の縁起が何によつて書かれたものか知る余地がない。その根本になる文献か、あるいははつきりした口伝があつてのものであるうが、先に述べた諸寺縁起集もこういう点から考えると大きな原因ともなるべき縁起として注意されてもよい。

さて、次に光明寺蔵の縁起と内容を全く同じくするものに上官太子拾遺記才三にみられる嘉禎縁起と諸寺縁起集に文暦の頃書かれた極楽変相曼茶羅の事というのがある。どちらも筋書は同じで光明寺蔵の縁起の大意をまとめあげた形である。又嘉禎三年に至るとして書かれた嘉禎縁起より十七年下つた建長六年にみられる古今著聞集の当麻の縁起もこれまで上げた資料のよせあつめのように思われる。ところで、当麻曼茶羅注（貞応二年）にのせる縁起段の縁起文には中将局の願に依つてとはつきり後世に語られる中将姫縁起の中将という言葉が表われて来る。しかし貞応二年より以後の嘉禎縁起とか古今著聞集、文暦に書き加えられた縁起等には中将という言葉でなく、約半世紀前に現われたと思われる光明寺蔵の縁

起や諸寺縁起集に表われて来る「大納言横佩郷息女」一よこはぎのおとど」を用いている。ということは、まだ中将姫縁起といわれて縁起が語られていなかったことを差すのではなからうか。曼茶羅下縁の縁起文が中心になつて語られるものであれば、当然、関係文献からも中将という言葉がみられるべきはずのものと考える。

古今著聞集に至つてはじめて、横佩の大臣に（藤原尹胤）と注釈がなされている。ところが西督の当麻曼茶羅疏才八には藤原豊成のことであるとしている。さて藤原豊成は実在の人物であるがヨコハギ大納言などという名はなかつた。そして又、息女中将姫の存在も記録と史実とは全くあわない。もちろん古今著聞集が横佩大臣に注釈を加えたことは何を根拠にして記したものが明らかにし得ないが土井慧鑑氏がいわれるように「是れ吾人が中将姫を潤色して妙齡の住人なりと説く伝説を否定して小説的空想に過ぎずとする所以なり」というよりこの場合仕方がないのではなからうか。

もう一つ同じようなものに元亨釈書がある。これも今

まであげて来た縁起とかわらず、大同小異に過ぎないことに気づく。この元亨釈書より百十数年下つた永享八年に西督上人が書いた当麻曼茶羅疏四十八巻がみられる。この百十数年の間、みるべき文献がないので縁起の状態はわからないが、この当麻曼茶羅疏に至つてはじめて中将姫の詳しい縁起の内容が描写されているのである。その才七巻が中心をなして、豊成の二子を儲けることからはじめ、母の死、継母の嫉妬、中将姫の入寺、化女曼茶羅織事、中将禪尼往生事等その詳細をみる事が出来る。すでにこれの出来た時代は室町時代であつて、室町初期には世阿彌元清が現われて、「当麻」「雲雀山」といつた中将姫縁起を題材とした謡曲を作っており、大いに中将姫縁起も語られていたことを想像する。

このように中将姫の縁起は当麻曼茶羅図と結びついて伝説と史実とがまざり合つて、民間の物語や寺僧の物語の中で発展して来た。それは浄土思想の発達と共にいつてよいであらう。このことについて、三品彰英氏は「この縁起は浄土信仰の布教の爲にも、ずい分役立つて来

たであろう。当麻曼荼羅が民間に有名になつたのはその有する芸術的価値ではなく、その成立を説明した中将姫の縁起そのものである。この曼荼羅が歴史上に持つ

文化的意味は曼荼羅の芸術に対してではなくて、民間の浄土信仰発達の過程に対してである」(史蹟と古美術才五卷才一号)と、このような考え方を持つて浄土信仰の

発達あるいは教化等をみつめる場合、むずかしい教理、思想をべたべた並べるより、教化方法の対象となる具体性がいかに必要であるかを感じさせる。鎌倉時代、浄土思想が盛んにもり上がり、この背景は勿論戦乱や天災地変、末法思想に伴なう大きな社会不安によることはいうまでもないがその結果、この時代に広い範囲にわたつて当麻曼荼羅の模本が流行し、今日その多くの逸品をみるのである。浄土教の宣揚に中将姫と曼荼羅の關係は頗る密接で以上に述べた如くであるが、又この縁起そのものの内容の上に於いても光明寺蔵の縁起あるいは当麻曼荼羅疏にみられるように、本願尼の往生、さらには聖衆來迎の場面、最後中将姫の運命が目出たく物語られている

ことは、その時代の世相の求めるところであつたのであらう。

以上のように、色々な伝説、史実がまざりあい、多種多様の社会の影響が複雑に組み合わされて、中将姫縁起なるものが出来上つたものと考えられる。

伝教大師の研究

——特に徳一との仏性論について——

小林 眞 澄

仏教は初め印度に広まり、後支那朝鮮を経てわが日本に伝来した宗教であるが、わが国に於て現に行なわれている諸仏教が、思想的にも印度支那の仏教そのままのものであると考えるならば、それは大きな誤りである。わが国の仏教は、わが国特有の日本仏教であつて、決して印度支那そのままの仏教でない事は云うまでもない。これは仏教ばかりでなく、その他多くのものに通じるものがある。しかるに、仏教は特に人の心を支配し、又教